Raymond Hinnebusch,

The International Politics of the Middle East.

Manchester and New York: Manchester University Press, 2003, ix+262pp.

立山良司（たてやまりょうじ）

I

2003年3月に米軍などがイラクに対する軍事攻撃を開始してから1年以上がたった現在，イラクを含む中東の諸国家や域内関係をどのように考えればよいのかが改めて問われている。その際に問題となるのは，中東各国の対外政策と域内の国際関係をどのような視点や枠組みで分析するかである。国際関係研究の主要な流れのひとつであるリアリズムにおいては，国家を国際関係の基本的な単位と捉え，個々の国家が他の国家とどのような関係を構築しているかに主な関心を集中させてきたため，国家の内側を正面から取り上げることはなかった。一方，リベラリズムは国家を部分からなる集合体として捉えているが，それでもトゥーズが指摘しているように，依然として国家が分析の単位であり，国内のさまざまなアイデンティティの競合や国民としての新たなアイデンティティ形成の問題はほとんど取り上げられていない［Tooze 1996，xvii-xix］。

だが，本書で著者が指摘しているように，同様な政治体制を持ち，同様な環境（システム）に置かれている国家であっても，それぞれが同じような対外政策をとるとは限らない。ある国は現状維持を目指し，他の国は現状を変更しようと修正主義的な行動をとる。また，合理的と思われる対外政策をとる国もあれば，非合理としか考えられない対外政策をとる国もある。こうした対外政策の違いを分析するためにはシステム，地域，国家の3つのレベルでの分析が必要だ。加えて本書で著者が繰り返し述べているように，国家が目指すアイデンティティと国内の他の集団が持つアイデンティティの乖離や対立，国家形成過程におけるイデオロギーの役割，指導者のパーソナリティやパーセプションなども分析対象に取り込み，これら国内要因と外部要因（地域，システム両レベル）との相互作用として各国の対外政策や域内関係を理解する必要があるだろう。その意味で本書はコンストラクティヴィズム的な視点に立っているともいえる。

II

本書の構成は以下のとおりとなっている。

第1章　中東の国際政治とは
第2章　中心と周辺――国際システムと中東――
第3章　地域システムにおけるアイデンティティと国家主権
第4章　国家形成と国際行動
第5章　中東における対外政策の策定
第6章　対外政策の比較――対外政策はなぜ多様なのか――
第7章　地域システムにおける戦争と秩序
第8章　グローバル化の10年（1991～2001年）の中での中東

第1章は本書全体の導入であり，どのような視点と分析枠組みで中東の国際政治，各国の外交政策を捉えるかを包括的に述べているが，大要はすでに前節で紹介した。

第2章はオスマン帝国の解体とウェストファリア型国家システムの中東への移入期から，脱植民地化，さらに冷戦期までを概観している。一連の過程で，リベラルなナショナリズム（1900～20年代），イスラーム復興（30年代），さらに第2次世界大戦後の新しい中間層を基盤とした急進的なアラブ・ナショナリズムが順次，中東政治の中心的なイデオロギーとなったとする著者の論考は，特段目新しいものではない。またこの章では，経済的な側面も検討されており，著者は中東の経済・政治は主として欧米に支

配されてきたという中心―周辺論の立場をとりながらも，石油輸出国機構（OPEC）に見られるように，中心に対抗し地域の自立性を確保しようとする試みもあったと指摘している。

第３章では主権国家のアイデンティティと，超国家的（supra-state），および亜国家的（sub-state）アイデンティティの相克関係が取り上げられている。中東においては歴史的に，ウンマ（イスラーム世界共同体）という共通のアイデンティティが各地域のローカルなアイデンティティを包み込み，多様なアイデンティティの存在を許容していた。しかし，主権国家が形成される過程おいて国境が人為的に画定されるとともに，経済的にも西欧との結び付きが強化されたため，旧来あったローカルなネットワークが機能しなくなった。そのため，それに代るものとして一方で汎アラブ主義や政治的イスラームといった超国家的なアイデンティティが中間階級を動員する道具となり，他方でモザイク状の亜国家的なアイデンティティが出現し，それぞれが競合する状況が生まれたという。特にアラブ諸国に関しては依然として，アイデンティティと領域との整合性がとれておらず，そのことが中東政治を不安定にしていると論じている。

第４章では，まず個々の国家の対外政策や国際システムとの関係を決定する要因として，⑴国家形成過程の初期の状況（国家建設過程に参加した勢力と排除された勢力の関係など），⑵国家の統合（consolidation）のレベル，⑶政治構造の影響（権威主義的か民主的か）の３点を指摘している。そのうえで，著者は中東諸国の国家形成の過程を①1920年代から48年まで，②49年から70年まで，③70年から80年代までの３段階に分けて説明している。1948年とはいうまでもなくイスラエルが独立した年であり，70年前後は第３次中東戦争の敗北とオイル・マネーの流入が同時進行し，中東諸国が大きな社会変動に見舞われた時期である。

第５章では対外政策の策定を決定要因および決定の構造とプロセスの２つの側面から論じている。前者の決定要因に関し，国内レベルは前述したようにコンストラクティヴィズム的な視点から，政策決定者のパーソナリティやパーセプション（ミスパーセプション）の重要性を指摘している。後者の政策決定の構造およびプロセスに関しては，国内世論や経済，国家安全保障に関係する官僚たちが取り上げられている。特に対外政策の決定プロセスにおける軍の役割については，著者のもともとのフィールドであるシリアをケース・スタディーに，軍のバアス党化や軍産複合体の問題などが検討されている。

第６章はこれまでの議論をさらに敷衍し，「中東諸国の外交政策行動に一定の共通性が見られると同時に，違いがあるのは何故か」という問いへの回答を試みている。その際の基本的な視点はすでに述べた国家の内と外との関係や国家統合のレベルなどであり，シリアとサウジアラビア，エジプトとシリア，イスラエルとトルコの３ケースを比較している。

第７章は度重なるアラブ・イスラエル間の戦争やレバノン内戦，イラン・イラク戦争（第１次湾岸戦争）と地域政治との関係を検討している。1967年の第３次中東戦争の影響や中東の多極化などが論じられているが，特に目新しいものではない。

第８章は1991年の湾岸戦争に至るサッダーム・フセイン体制の意思決定のプロセスの分析，米国による覇権の確立，中東和平プロセスの開始と失敗などが検討されている。サッダーム・フセインが何故，クウェートに軍事侵攻し，かつ米国を中心とする多国籍軍との戦いを選択したかについては多くの議論があるが，著者が強調しているひとつの点は，第５章でも論じられている政治指導者のパーソナリティやパーセプション（ミスパーセプション）の問題である。確かに著者が比較しているように，シリアのハーフィズ・アサドは一定の合理的判断を行ったと思えるのに対し，サッダーム・フセインが合理的な選択をできなかったのは何故かという問いへの回答は，フセイン体制の特徴をより明確に示している。

Ⅲ

以上からも明らかなように，著者は国際システムにおける単位としての国家の役割を重視するとともに，アイデンティティや国家統合のレベル，国家形

成上のイデオロギー，政治指導者の資質など多元的な見方の必要性を強調している。こうした立場は，中東や第三世界の国際関係や安全保障問題を分析する際に，複合的な視点を設ける必要があるという1980年代後半から論じられてきたアプローチの延長線上にある。例えばコーラーニらはアラブ世界を含む第三世界においては，国内の諸問題や宗教，文化，社会経済などの側面が国家間対立と分かちがたく結びついているとの立場から，アラブ諸国が直面している安全保障問題を分析している［Korany, Noble and Brynen 1993］(注1)。同様にアユーブも第三世界の安全保障を論じるためには，国家形成の過程やエスニシティなど国内外にまたがる問題，地域レベルと国際レベルとの狭間におかれた国家という制約など，さまざまな側面を考慮に入れる必要があるとしている［Ayoob 1995］。また，中東のナショナリズムとアイデンティティの関係についてのローの分析も，新たに成立した国民国家と，それ以外のアイデンティティとの競合関係という点で共通した問題意識に基づいている［Law 1996, 118-134］(注2)。

こうした理論的な側面とは別に，第8章で論じられている「パックス・アメリカーナの失敗」などの部分は，現在のイラク問題や中東と米国との関係を理解するうえで有意義だ。著者によれば，米国は冷戦の終焉と湾岸戦争を契機に中東において自らの覇権を確立した。しかし，イスラエルとアラブに対する「二重基準」に現れているように，米国の覇権は規範を伴っておらず正当性を欠いている。それ故，米国の覇権に対抗するために地域のナショナリズムやイスラーム主義的な動きが拡大し，特に「弱者の武器」として小集団によるテロが増大しているという指摘は，9・11同時多発テロ事件後により明確になってきた中東と米国との間にある構造的な矛盾を突いている(注3)。

しかしその一方で，扱っている対象があまりに広範にわたっているためだろうか，全体として総花的であり，個々の議論が必ずしも十分ではないと思われる箇所もある。例えばイスラエルにはリクード・入植者陣営という極めて強い失地回復主義勢力が存在している故に，ハト派よりもタカ派の方が政治的な影響力を拡大しやすいとして，1970年代後半以降のリクードの伸張と労働党の退潮を説明している。しかし，これだけでは1990年代に入り何故，労働党が二度政権に返り咲いたかを説明することはできない。占領地問題を含めたイスラエルの中東和平政策と国内政治との関係を議論するには，入植運動もさることながら，治安状態を含む国家安全保障政策の動向と国政選挙における有権者の投票行動との相関関係をもっと検討するべきだろう。

また，著者は国家の外交政策の志向を決定する要素として，ある国家の体制を支配している勢力が所与の状況に満足しているか否か，および国家統合のレベルが高いか低いかの2つの指標を使い，支配勢力が満足しておらず，かつ統合レベルが低ければ対外的には急進的なレトリックを使用するが，支配勢力が満足し統合レベルが高ければ現状維持を志向するなどとしている。この結論は確かに分からないではないが，理論面を含め十分な普遍性を主張できるほど説得的であるとは思えない。

むしろ，同様の問題への理論的な取り組みでいえば，ブザンの「強い国家」(strong state)，「弱い国家」(weak state) 論の方が明晰だ［Buzan 1991, Chap.2］。ブザンによれば「社会政治的な凝集性」(socio-political cohesion) の程度によって，国の「強い」「弱い」が測定される。その場合，エスニシティや宗教・宗派，イデオロギー，国家が目指す理念などに関し国民がどの程度の同一性や共通性を有しているかによって，国民の「社会政治的な凝集性」の高低が決定され，凝集性の度合いが低い国家は「弱い国家」と見なし得る。こうして定義された「弱い国家」は国内に多くの不安定要因を抱えているため，国家レベル，地域レベルいずれにおいても安全保障上の問題を引き起こす。こうしたブザンの観点を補完的に取り入れるならば，著者のいう支配勢力の現状に対する満足の度合いと国家統合のレベルが対外政策にいかに影響を及ぼすかという分析は，いっそう説得力を持つように思われる。

Ⅳ

こうした面はあるものの，本書は国際関係論などにおける最近の学問的な成果を積極的に取り入れた意欲的な取り組みであり，中東諸国の対外政策や中東の域内関係を理解するうえで多くの示唆に富んでいる。

「イラク戦争後」の中東地域で今後いっそうの課題となるのは，各国の統治のありようだろう。国連開発計画（UNDP）の『アラブ人間開発報告』2002，2003年版がそれぞれ指摘しているように［UNDP 2002；2003］，国民の政治参加，情報や社会の開放，女性の社会参加，経済開発の促進などは互いに絡み合って，「良い統治」や正当性の問題を提起している。その一方で，国際レベルで見れば中東各国は「パックス・アメリカーナ」的な状況と鋭く向かい合っている。結局，中東各国はこうした「内」と「外」との緊張関係の中で対外政策を決定しているのであり，その意味で本書は今後の中東を考える際の有効な視角や枠組みを提供している。

（注１）　コーラーニとヒネブッシュはそれぞれ同様の視点から，以下の本をまとめている。Korany and Dessouki（1991），Hinnebusch and Ehteshami（2002）。

（注２）　他に中東におけるアイデンティティと外交政策を分析したものとしてTalhami and Barnett（2002）がある。

（注３）　イラク戦争後の中東における「パックス・アメリカーナ」が構造的に抱える矛盾については立山（2003, 2-16）を参照。

文献リスト

＜日本語文献＞

立山良司 2003.「イラク戦争後の中東――『パックス・アメリカーナ』の出現とその矛盾――」『国際問題』第522号（９月）.

＜英語文献＞

Ayoob, Mohammed 1995. *The Third World Security Predicament: State Making, Regional Conflict, and the International System*. Boulder: Lynne Rienner.

Buzan, Barry 1991. *People, States and Fear: An Agenda for International Security Studies in the Post-Cold War Era*. 2nd edition, Hemel Hempsted: Harvester Wheatsheaf.

Hinnebusch, Raymond and Anoushiravan Ehteshami 2002. *The Foreign Pollicies of Middle East States*. Boulder: Lynne Rienner.

Korany, Bahgat and Ali. E. Hillal Dessouki 1991. *The Foreign Policies of Arab States: The Challenge of Change*. 2nd edition, Boulder: Westview Press.

Korany, Bahgat, Paul Noble and Rex Brynen eds. 1993. *The Many Faces of National Security in the Arab World*. London: Macmillan Press.

Law, Margaret 1996. "Nationalism and Middle Eastern Identities." In *Identities in International Relations*. eds. Jill Krause and Neil Renwick. London: Macmillan Press.

Talhami Shibley and Michael Barnett eds., 2002. *Identity and Foreign Policy in the Middle East*. Ithaca: Cornell University Press.

Tooze, Roger 1996. "Prologue: States, Nationalisms and Identities: Thinking in IR Theory." In *Identities in International Relations*. eds., Jill Krause and Neil Renwick. London: Macmillan Press.

UNDP 2002. *Arab Human Development Report: Creating Opportunities for Future Generations*. ＜http://www.undp.org/rbas/ahdr/englishpresskit2002.html＞

――― 2003. *Arab Human Development Report: Building a Knowledge Society*. ＜http://www.undp.org/rbas/ahdr/englishpresskit2003.html＞

（防衛大学校総合安全保障研究科・国際関係学科教授）